夢に消えたインパール作戦（夢だった）
後世の為に！また、自分の為に！

清水　郷治（大正 9 年生まれ）

「我が青春時代　戦場に有り」

昭和十五年十二月十日、高田の東部第六十七部隊に入隊。（満二〇才）

ここ高田の部隊で翌年三月まで初年兵として「第一期」訓練の期間を過ごし、昭和十六年三月三十日、我々新兵は、なつかしの兵舎を後にして、全員四列の縦隊で駅まで多くの人達に見送られて、専用の電車で中支派遣第五十八聯隊要員となって戦場の中支へと旅立って行くのである。中国では、「南京」を経由して部隊が待つ「宜昌」に、ここから揚子江を船で渡り、対岸の聯隊本部に到着。我が引率隊長が直ちに申告を済ませて、さらに奥地の中島高地に進み、第一大隊駐屯地に第一中隊が配属され、長旅の疲れも忘れて一段落、四月末日であった。

宜昌は（当時人口五千人あまり、病院もあり、ある程度の都市）四川省の山奥から流れる源流が、揚子江の有名な三峡の出口にあり、天空を断ち切った絶壁の川岸を矢のように流れ、河幅約三百メートルあまりの大河となったところである。

この河岸は、宜昌作戦当時、激戦のあった中島高地であり、第一中隊が配属された。

当時の中島中隊の激戦の跡が忍ばれ、また後続の我々も同じ運命をたどるのか、この高地の穴蔵※（※岩石を掘った穴の休み場）で対陣して約半年、その後、守備隊交代の命令により荊門地区へ移動する。昭和十七年三月の事であった。

その後、間もなく軍は精強第十三師団を中心に重大な任務、すなわち「重慶作戦」の準備が待ち構えていた。

新任務を受けた我が師団は、猛訓練を開始。来る日もまた来る日も実践を凌ぐ訓練に明け暮れる中、作戦の発動下令ないまま、年の暮れが差しせまられた頃、我が五十八聯隊は突如として南方への転進下令となった。すなわち、昭和十七年十二月下旬、南方転進が開始されたのである。日本軍が「重慶作戦」を放棄することは、すなわち主動の地位を失ったことであり、敗戦への一里塚は案外こんなところに立っていたのではないか。後日、聞き及んだ次第。

その後、当然情勢が変わり師団が改編されて、我々の五十八聯隊は師団から離れ、南方へ転用されることになったのだ。

当初、行き先はガタカナル島と言われていたようだが、進路が変更されマレー半島に上陸した。（すなわちシンガポール　二月十日）

その後、直ちに鉄道でマレー中部地区に移動して、第一大隊はタイピン地区へ、聯隊(れんたい)本部はクアラカンサールに（他は省略する）。マレー滞在中は、毎日ジャングルの中で激しい戦闘訓練にあけくれた。それは「将来の転用に備える」と言うところか。ジャングルの中での訓練は、日中四十度位の暑さのため、夕方から夜半実施される日が多い。日中は、休養に近くリラックスして英気を養うように配意されたりした想い出の多いことも忘れられない。

また、現地人は我々の厳正な軍紀と厳しい訓練に、敬意の念を持っていたと聞いた事や、治安維持の目的を達成した事は、ほこり得る事である。

さて、ジャングルの中の訓練も進んできた三月末頃、第三十一師団の師団長として佐藤幸徳(こうとく)中将が着任し、師団誕生・編成下令第十五軍の任ビルマ戦闘序列に編入された事である。

以後、いよいよビルマ戦線へと進むことになるが、どんな運命が待ち構えているのだろうか！

「ビルマへの転進」

我が五十八聯隊(れんたい)は五月初旬、マレーの駐留地から泰緬(たいめん)国境の「シャン高原」を横断し、ビルマのペグー集結を目的に順次行動を起し、第一大隊が先頭で六月初めペグーに進出した。ここまで来る泰緬(たいめん)国境の行動は、以下のとおりである。

特殊とも言える悪条件下、緊張した明け暮であった。

地形の嶮(けわ)しいことに加え雨期の最中である。当時、鉄道第四聯隊(れんたい)による突貫工事中（タイ網鉄道）であり作業現場をよけながらの行軍であった。

建設隊に「コレラ」が発生し蔓延(まんえん)。加えて周りがジャングルの中であり、虎やサソリに注意を払う中、連日、強行軍で突破したという特異な事情は、他の行軍では見られないことだ。コレラの恐ろしいことは身に染みて味わった。

道路建設に使用されていた英軍捕虜(ほりょ)は、当然ながら死亡者が多く出て、コレラによるものが多数をしめ、我々通過部隊は、毎日心をとがらせながらの行動であった。

これからいよいよ北部ビルマへと進み、八月初旬ペグーで体調を整えて北進へと出発。イエウを経由し、九月上旬「ウントウ」に前進して、大変嶮(けわ)しいジュビー山系に入り、いよいよ北部第一線の警備に入った。

ここはチーク林の多いジャングル地帯、野象、虎、猪の多い地帯。最も危険地帯で、忘れられないところでもある。

また、ビルマ雨期ははっきりしていて、九月下旬にはピタリとやんで、惨めな雨期はウソのように晴ればれとした。北ビルマに入って気分も正常にもどる。

体験のない人には到底想像できない。北ビルマの第一線警備は、インパール作戦の準備期間の印象が当然のことである。ここ北ビルマの秋は、さすがに涼しい。気温も夜分には急に冷えて、屋内では薪を焚いていた。夜が明ければ戸外は雨でも降ったかのように、チークの葉から落ちる夜露の滴(よつゆしづく)でしっぽりとしていた。

さて、師団司令部はすでに「ウントウ」に進出。年の瀬も押しせまったその頃の部隊は、チンドウィン河畔に向って、最後の移動を開始した。時すでに年明けて二月初旬、ジビュー山系以西に移動完了した。

もうすでにインパール作戦のことがささやかれていた。

我が聯隊(れんたい)は、いよいよインパール作戦の準備で最後の段階に入っていた。

その頃から敵機の「交通補給」妨害は、日増しに激しくなり、師団の作戦準備は中々進捗(しんちょく)しなかったようである。このため三月十五日の作戦発起日に、予定どおり渡河(とか)できたのは、我が五十八聯隊(れんたい)の突進隊だけだったようである。その頃から、我が一大隊本部のメトカレー方面で爆撃音を聞く。この事はあとで知ったことであるが、柏崎市出身の西巻少尉がここでの銃撃で足を負傷され、後送されたと聞き及ぶ。

さて、いよいよ進撃も本格化のときがきた。

その後、三月十五日夜十時半を期し、チンドウィン河を渡河(とか)し進撃開始された。密林に分け入り、地獄への一本道を進んでいく。しかし、不思議に敵機の飛来なく、天祐(てんゆう)と思いしが？

一方、また主力に先立って、五十八聯隊(れんたい)の先遣隊はすでに渡河(とか)して前進。主力の前進を容易ならしむることであったが、実際、敵は河岸監視部隊と交替になり、先遣隊が撃破して行ったことから各隊は突進も早くなった。十六日、十七日には印緬国境(いんめん)を突破して、中間目標の「ウクルル」（要衝(ようしょう)）に向って破竹(はちく)の進撃を続けていたのだ。

「コヒマ戦闘の回想」

コヒマの戦闘は、絶句に余る悲惨な連続だった。

到底、私ごとき筆不精には書き現せない。ただ、走馬灯(そうまとう)のように想い出が頭の中を駆け巡るだけ。戦死した戦友の小指を切り取って、焼いて遺骨にした時のどう表現してよいか、悲しい思いで胸が一杯。また、一カ月以上も食べる米もなく、野草の芽や葉など飯盒(はんごう)で煮て食べる。出発時に渡された少々の岩塩を少しなめての食事だ。激しい戦闘が

続く。生きているのが不思議、そんな毎日が続く。

日中の戦いにおいて、持てる兵器の差は問題にならない。小銃なんて相手にならない。戦いは、夜間が主であった。日本軍は夜間が得意で、逆に敵は夜間が不得手であった。移動ももちろん夜間に限られ、できるだけ兵力の消耗をさけながらも力の差は圧倒的であり、全て無理のないように戦を進めている。

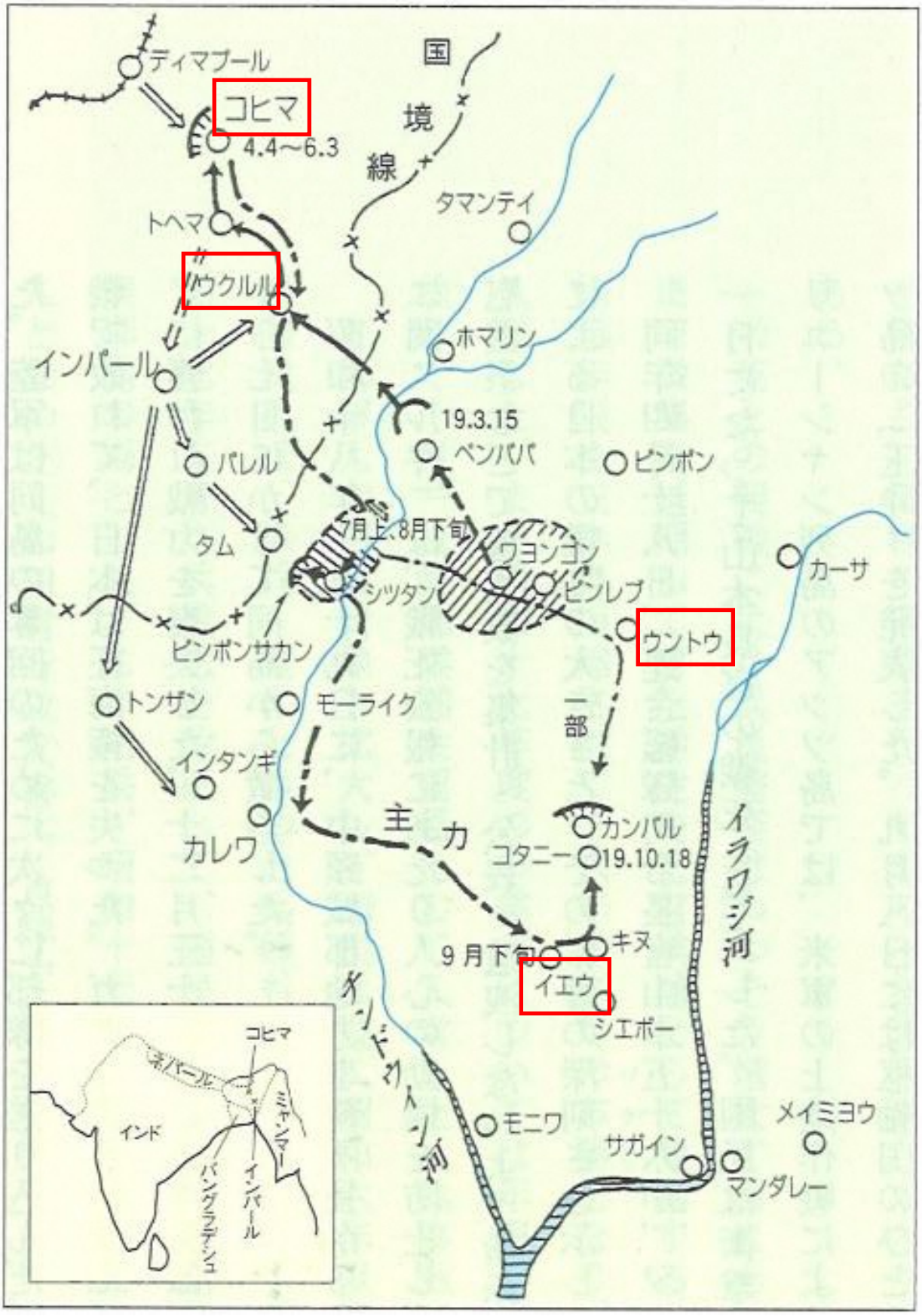
こんな日々が、いつまで存続対応できるのか。コヒマ戦が後半になるにつれ、敵は装備、兵力が充実しているので、できる限り消耗をさけて行動している日本軍は問題外の様子。日本軍の戦力低下が目立ち、ガタカナル島の二の舞になるのかと、精神的苦しみも加わり、つらい日々が続いていく。

兵器も弾もなく夜間の突撃のみ、後半になるにつれ英印軍は後方から支援が益々増強、対して我が軍は兵員どころか何もかも皆無に加えて、食料の補給も皆無。夜間の戦闘で帰らぬ兵士、残りの兵士も毎日少なくなり、全く兵は消耗品といわれるとおり、兵士も誰一人なく生気のない顔々。帰らぬ兵士の始末もできない。もうこのコヒマの地で玉砕(ぎょくさい)することを覚悟するより致し方なし。

毎日飛来する敵機が、物資、兵器などをダクラス輸送機が落下傘で落として行く。また、夜、塹壕(ざんごう)の中で聞く地底から湧き上がるような友軍の突撃の雄叫びが、その時、豆をいるように敵の猛射(もうしゃ)、その後静まりかえったときの無情感。一夜にして山の姿を変える火砲の威力、大地をゆるがして現れた敵の戦車、背後にできる敵陣地、爆破した橋は一日で復旧する早さ、勝ち戦の痛快さを味わい続けて来た我々には全く耐えられない。悔しい思いは、若き青春時代の兵士に課せられた運命としてすまされるだろうか。

戦後七十四年、この平和な時代は戦争での犠牲者の上にあること、その成り立ちを子々孫々に伝えることが生き残った我々の大きな責務である。これからの教育の場でも政治の場でも。

凡例：本書は、筆者の表記を尊重し、記載しています。



参考：インパール作戦経路図「上越市史　通史編 5」